

尾西康充著

『小林多喜二の思想と文学』

——貧困・格差・ファシズムの時代に生きて』

評者：立本 紘之

本著は日本近代文学研究を長年手掛けて来た著者による、2008年（刊行物としての初出は2009年）から2013年にかけての小林多喜二に関する寄稿文・講演記録を中心とした論稿集である。所謂「蟹工船ブーム」以後の時期の論稿を纏めたものであり、近年の多喜二研究の最新動向を踏まえた多様な研究の一端を窺える一冊となっている。

本著は以下に示す様に全Ⅲ部＋前後の構成となっている。

はじめに

I 多喜二の作家的出発

- 1 なぜ多喜二は小樽に移住したのか—慶義の民事裁判資料から
- 2 庁商時代の国語教師渡辺卓
- 3 「光」と「闇」をめぐる「循環小数」— 榊田民蔵・アンリ＝バルビュス
- 4 多喜二と「小樽新聞」—河上肇「唯物史観に関する自己清算」とストリンドベリ『結婚生活』
- 5 有島武郎からの影響—多喜二の初期小説

II 多喜二の作品を読む

- 1 「一九二八年三月十五日」
- 2 「蟹工船」

3 「不在地主」

III プロレタリア文化とジェンダー視点

1 「独房」と獄中書簡

- 2 獄中作家を支援する女性たち—田口タキ・村山箒子・原まさの

おわりに—なぜ再び日本社会はファシズムの道を歩むのか

まずは本著の内容を概略的に見ていく（以下部・章題は省略）。

はじめに 蟹工船ブームの背景と、その前後の多喜二研究の進展（『草稿ノート』の刊行・国際シンポジウムなどを踏まえた現代の・国際的な視点での多喜二文学の再評価の意義や、「近代小説」が「政治と最も近い距離に存在する文学形式」との前提の下に、旧来の「政治と文学」の問題とは異なる形で多喜二文学を読み替える動き）などの説明及び問題提起。

I 小樽時代の多喜二の思想形成過程に関する論稿。

I-1 多喜二一家小樽移住の契機となった伯父慶義の不動産売買訴訟の民事判決原本（新規資料）を用いながら、「虚言」まで使い土地問題にのめり込む伯父の経営するパン屋での奉公を通し、多喜二が「個人を収奪する社会の欺瞞を洞察」した（24～25頁）という彼の思想的出発点を再考する。

I-2 多喜二に文学への目覚めを与えた小樽商業学校の国語教師渡辺卓の、「立場や境遇によって人間を差別」せず「ひとたび決心すればかならず行動に移す」気質が多喜二にも受け継がれたこと（27頁）と、その後の渡辺の人生、彼の母校「神宮皇学館」の学生と多喜二の交錯（27～28頁）に関する語り。

I-3 多喜二のプロレタリア作家としての出発点となった「光と闇」を巡る思考に影響を

与えた、

①河上肇・櫛田民蔵師弟の相互批判により深化したマルクス主義研究 (32～36頁)

②ヨハン・アウグスト・ストリンドベリの戯曲「ダマスクスへ」に描かれた宗教的な「光と闇」(37～41頁)

③アンリ・バルビュスが掲げた「闇」の中から「闇」を克服して「光」を放とうとする社会的実践の道」(44頁)

の三つの同時代的言説を取り上げる。

I-4 社会改革を目指した多喜二の「思想的成長の軌跡」(50頁)として、

①「小樽新聞」紙への投稿、「左翼文芸研究会」を始めとする小樽での活動 (50～54頁)

②河上肇「唯物史観に対する自己清算」を読み、「実際の唯物論者すなはち共産主義者」への自己変革を遂げつつあった姿 (59頁)

③ストリンドベリのリアリズム・観察眼への高い評価と、彼の著作『結婚生活』を通じた田口タキとの関係の見つめ直しを経て、マルクス主義思想へ「自己清算」を図る過程で彼から離れた多喜二 (59～66頁)

の三つの体験が示される。

I-5 多喜二の初期小説に焦点を当て、

①「老いた体操教師」(1921年。2007年発見の新規資料)に既に見られる「個人を追い詰めてゆく社会の仕組み」への批判という基本姿勢 (67～71頁)

②有島武郎『生まれ出づる悩み』の主人公への共感、資本主義による搾取と収奪への道徳的公憤を通しての創作土壌形成 (72～75頁)

③自己の罪意識(親族を犠牲に身につけた教養を罪と感じる意識)との葛藤、屈辱的な体験を経ての自身の客観視による主体の確立、それにより罪の意識を社会変革への志向に転じる (76～94頁)

という多喜二の主体確立プロセスを追う。

II 上京前の代表的三作品に関しての、多喜二の草稿ノート研究などを踏まえた論稿。

II-1 章題作で多喜二が、

①言葉によって白色テロを告発し、同志達の憤怒と苦しみを伝えるという無産主義運動での「作家の役割」を発見している (103頁)

②異なる個性を持つ人々が連帯意識を高めていく「個人と集団の弁証法」のモチーフ描写 (108～110頁)

③「“英雄的な”闘士」だけ描くのではなく、様々なタイプの人間が運動参加し次代までそれを継続することの意義の強調 (113～114頁)の三つを示し、描き得た点を評価。

また章題作に続く作品「東俱知安行」の、

①労働者上がりの選挙候補者と同作の主人公自身を含むインテリ出身の人間との心理的距離 (115～119頁)

②「普遍的な知見を持つインテリ作家」と「労働現場で飛び交う肉声に触れている労働者作家」が双方の短所を補い運動展開すべきという多喜二の基本的考え方 (123頁)

という特筆点を提示した上で、組合員の理論学習を自らの地位を脅かすものとする幹部の姿 (128～129頁。活字化の際削除された部分)や、拷問を行った警察官や検事の「利己的かつ卑小な役人根性」に基づく行動 (130～133頁)など、章題作中の周辺人物像にも焦点を当てる。

II-2 章題作において、

①労働者同士が対立し、憎しみを抱かされている (141～142頁)

②地域(民族) (143～144頁)

③性 (145～147頁)

という現代日本社会に通じる「三つの格差」による差別化で、権力が手を下さずとも「帝国日本の支配構造が一層強化」(147頁)されていたにも拘らず、最後には階級的自覚に至った

蟹工船労働者の姿を通し「帝国日本によるヘゲモニー」の欺瞞と「労働者が人間らしく生きる権利を要求して立ちあがる」ことに正当性を与えた(149～150頁)点を意義として強調。

さらに同作中の漁夫・船頭・監督の関係、「赤化」への反応の違いなど労働者間の「格差」に再度言及。それと対比させる様に、1930年5月の「戦旗」防衛関西巡回講演会の三重講演で多喜二ら『戦旗』代表作家陣を出迎えた労、農、水平社の連帯組織〈三角同盟〉を「無産者階級の広範な連帯を呼び掛けていた」多喜二の運動の理想の姿として描く(173頁)。

II-3 章題作の前提となる北海道開拓と不在地主支配の実態(175～180頁)の中で、下層労働者や小作人が「国民」という記憶を与えられ、「自己に加えられていた暴力に無感覚」になった状態で期せずして「帝国日本の尖兵」となる様と、いち早く植民化された北海道でのそうした人々を巡る帝国日本と農民組合のヘゲモニー争いの展開(181～186頁)を説明。

次いで同作掲載時の状況説明と蔵原惟人の批評文や後年の同作評価を踏まえ、蔵原評にある「見るべき」「研究すべき」ものである、「小作人の間に強固に存在した《父権的温情主義》」及び、多喜二の不十分な争議取材が蔵原評に見る不満点を生んだという事実が示される。

さらに未定稿「防雪林」の草稿ノートや同作執筆の参考作品であるゴーリキー「チェルカッシュ」などを踏まえ、「原始的」な「末梢神経のない」人間像を描く試みから、三・一五事件などを受け「組織体としての運動の展開」へと多喜二の意識軸が移動した結果、章題作へ改稿(212～226頁)された流れを改めて説明。

III 多喜二を中心としたプロレタリア文化運動関係者とその周辺的女性達に関する論稿。

III-1 1930年の多喜二の獄中書簡及び入

獄体験を元にした小説「独房」を用いて、獄中での自己「対話」を通じ平静を保とうと努力する多喜二の姿と、同作草稿ノート内の削除部分に見られる、「素朴な実感」に即し運動の動揺から立ち直る姿や性を巡る表現に関する自己否定のモメントの働きといった多喜二の弁証法的発展の形について語る。

III-2 田口タキへの獄中書簡に見られる多喜二の葛藤(支援活動をして欲しいという意識と自立を促すいたわりの狭間での)や、「転向」を余儀なくされた村山知義と妻籌子、そして籌子が運動者として最大限の敬意を抱いていた蔵原惟人の三者を軸とした夫婦間の葛藤、そして中野重治と妻原まさの関する「転向」を巡る葛藤の3つを例に、パートナーが入獄・転向といった極限状態に置かれた女性もまた道徳的強迫観念などで過度の精神的負担を余儀なくされ、苦悩の時間を過ごしていたと述べる。

おわりに 多喜二検挙までの背景・経過と地下活動中の多喜二による運動指導の説明後、

①「不当な場所におかれた自己をありのままに認識すること」から始まる「既存の社会組織を変革するまでの一連のプロセス」(281頁)としての「階級」という方法概念

②「奴隷根性を棄てる」ために「目の曇り」を拭えという訴え

③個人の孤独感や無力感に乗じて個人を分断しようとするファシズム社会に対しての「組織体としての俺達の運動」発展の必要性といった、多喜二とその文学が示した訴えを現代社会に向けて再度投げかける。

以上が本著の内容概略である。以下、本著に対し評者が感じた若干の点を述べていく。

本著が刊行された2013年は小林多喜二没後80周年の節目の年であり、本著の「おわりに」

は記念行事の一つ「小樽小林多喜二祭」での著者の講演を元に行っている。同年には他にも日本民主主義文学会や共産党及び同党と関係を持つ団体などが主導した記念の催しや刊行物での取り上げなどが盛んに行われた。本著はそうした動きの延長線上にある多喜二の「顕彰事業」の一環として捉えてよいだろう。本著収録の論稿の起点となる2008年もまた多喜二没後75周年の年で、同年に起こった蟹工船ブームとも相俟って多喜二の顕彰が同様の形で盛んに行われている。

このような顕彰事業とそれに並行した多喜二研究は、主に日本共産党及び同党に近接する民主主義文学運動の領域を中心に展開されて来た。1950年代以降の「多喜二・百合子研究会」や、新日本文学会→日本民主主義文学会という文学運動の系譜の中で、宮本顕治・手塚英孝及びその後継者を含む共産党運動者とそれに近い人々を軸に現在まで続いて来た活動がその例である（本著も日本民主主義文学会機関誌『民主文学』が初出の論稿五本を含む）。だが同時に「多喜二・百合子研究会」創設の発端にある、共産党五〇年問題を背景とする「所感派」系『人民文学』との対抗関係や1960年代の新日本文学会分裂などの事象に見られる様に、多喜二研究にある種の政治的・組織的要請に基づく力学が時に働いたのもまた事実である。

翻って現在の多喜二研究を見ると小樽商科大学が主催し、多様な研究成果を示して来た国際シンポジウム（2003、2004、2005、2008、2012）などの様に、従来の半開放的領域での顕彰事業を軸とした運動の枠を超え多様且つ国際的な進展をも見せつつある。また2008年の蟹工船ブームは既存の顕彰領域の外から自然発生的に（商業的な作用も多分にあったが）生まれ高揚し、それが一時的な共産党運動拡大にも繋がるなど既存の領域との交錯も見せた、まさ

に新時代の多喜二ムーブメントであった。こうした新しい発展を踏まえ、顕彰領域に身を置く人々がこれからどう多喜二研究を広汎に発展させ得るか、記念の年が去った2014年以降の動向を評者は注視したい。

また本著の気になる点として、取り扱っている時期が主として1930年で止まっていることが挙げられる。本著の一つのテーマが「格差」であり、共産党運動の方に焦点を当てた作品への言及を取って外している様な節もある上、本著が主に多喜二のプロレタリア作家としての確立過程に重点を置いているのも、上京前の作品群及び獄中体験を巡る論稿で筆を止めている理由と考えられ得る。

多喜二の小説作品とその背景を丹念に調べることで、プロレタリア小説家小林多喜二の確立過程を追究出来るというのは本著が示している通りである。だが29年の「不在地主」の後も30年の「工場細胞」、31年の「オルグ」などが続き、32年の「党生活者」などに続いていく。これらの作品で多喜二が焦点を当てたのは共産党員の活動の姿であり、様々な葛藤を孕みながらも「党の線に立つ」プロレタリア作家小林多喜二の軸は明確に示されている。これらの作品群に触れないというのはつまり、多喜二の小説だけを追うことで彼の確立過程を見ていく試みは1930年が限界だという前提を暗示していないだろうか。

また本著「II」で取り上げた作品を一つの節目とし、その後の「工場細胞」「オルグ」などを「飛躍の過渡期」と位置付け、「沼尻村」「党生活者」（1932年）「地区の人々」（1933年）及び長編構想「転形期の人々」などを党員作家小林多喜二の一つの到達点とする考え方は、不破哲三『小林多喜二 時代への挑戦』（新日本出版社、2008年）で改めて明示された図式である。本著もまたこの不破の論（2008年の多

喜二記念の催しでの講演が元)に影響を受けているとも考えられる。今なお共産党の顔として、また『赤旗』や『前衛』などで「科学的社会主義」史の語り手としてその存在感を強く示し続ける不破により多喜二文学の時期区分が提示されたということは、民主主義文学とそれに近接する学問領域に対する組織的要請の力学の問題と無関係ではないだろう。

こうした前提の下で多喜二の確立点を設定することは、31年の時点で「完成された」形で運動に復帰する小林多喜二の像を生み、これ以後の多喜二をある種の達成者と位置付けかねない問題も孕んでいる。それが行き過ぎると江口渙『たたかひの作家同盟記』下巻(新日本出版社、1968年)で書かれた、31年上半期の作家同盟の混乱の中、中央委員会で突如発言を行い場の空気を一変させ、幹部連の自己批判までも促し、運動の再出発の流れを作る(同著70~73頁)様な、ある種の英雄的叙述にまで至る可能性が出てくる。「英雄的叙述」は30年のプロレタリア作家同盟での「芸術大衆化に関する決議」(『戦旗』30年7月号)などで、貴司山治の著作群等を巡り大いに批判された部分であり、戦前期文化運動の継承者たる民主主義文学運動とそれに近接する文学研究の領域にとっても多喜二をそうした叙述の可能性の領域に持って行くのは本意ではあるまい。

31年以降、あるいは死に至るまでの間においても多喜二は蔵原惟人という一つの「模範的共産主義者」の完成像(当時としての)を指針とし、自己を練磨し続けた探究者であり続けた。そうした観点で研究を進めるためには、小説だけでなく多喜二の評論などにも目を向け、入党

以前の時期(そもそも評者は先述の不破の著作も含めた従来のプロレタリア文化運動研究においての、プロレタリア文化人の31年の大量入党や「党指導」の問題に関しての分析には疑問点があると考えており、その観点から同著や本著の様な、入党を一大転換点とする多喜二の確立点設定にも疑問を感じる)も含め、その後党員として活動を続けた(時に誤謬を含みながらも当時の理論水準の下で政治的成長と運動の立直しを図った)政治家小林多喜二像と本著に代表される小説家小林多喜二像を共に包括的に研究する視点こそが必要だと評者は考える。

以上が本著に対し評者が感じた点となる。多少所見を述べて来たが、本著は小林多喜二没後75周年から80周年の間の時期に着実に進展した多喜二文学研究の一つの到達点を指し示し、研究動向への理解を深めるのに役立つ一冊であることは間違いない。副題にある「貧困・格差・ファシズム」が有形無形の形で捉えられつつある昨今の日本において、前述した様に多喜二の顕彰領域に近接してこれまで展開されてきた多喜二研究がより広汎な人々を巻き込みさらなる展開を見せるために、学問の領域はどう行動すべきかを考える上でも、評者は改めて本著の一読を強く勧めたい。

(尾西康充著『小林多喜二の思想と文学——貧困・格差・ファシズムの時代に生きて』大月書店、2013年9月刊、295頁、定価2,800円+税)

(たてもと・ひろゆき 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)